

# Get/Give/Take・句動詞・ヴァイキング

松 瀬 憲 司

## *Get/Give/Take, Phrasal Verbs and Vikings*

Kenji MATSUSE

(Received October 3, 2011)

Lots of Old Norse words have flowed into English through the contact between Anglo-Saxons and Vikings which took place about 1,200 years ago, and through the situation in which the two peoples lived side by side in northern and eastern England. As the (loan)words that seem to have been imposed via the source language agentivity, we have *get*, *give*, and *take*, which form very central items in the English vocabulary. Also the Vikings' influence is thought to be crucial to the introduction of new types of phrasal verbs into English. Some of these new phrasal verbs, however, co-existed with their older semantically equivalent counterparts: prefixed verbs. It is a rather strange phenomenon, because the latter had not so strongly been needed at that time owing to the change of word order in English. One of the possible explanations for it might be the metrical exigency when making rhymes for poems, just as we employ *did make* instead of *made* so that it can make a rhyme with *ache*. And the language shift to English on the Vikings' side as the final output after the contact between the two peoples was completed by way of Vikings' learning English in the environment of a bilingual society made up of monolingual speakers of different languages.

**Key words** : Old Norse, borrowing, imposition, SL/RL agentivity, rhyme

### 1 はじめに

松本(1983)は、「英語の話し言葉の中には、日本人にとって使いにくい *give* と *get* の表現が多いが、逆に *give* と *get* を使いこなせれば、たいがいの英会話には困らない」(傍点筆者)と言う。両者には英語の「ロジック」が詰め込まれているかららしい。だとすれば、それはまさに英語そのものと言えよう。どのような言語においても、英語の *have*, *be*, *do/make* に当たるものが動詞体系の中心を形作るであろうことは想像に難くないが、それに加えて、英語では何と言っても *give* と *get* であると松本(1983)は主張するのである。さらに言えば、ここに“a central item of vocabulary”(Townend 2006: 78)である *take* を付け加えてもいいだろう。

英語においてそれほど重要な役割を果たす *give* と *get* (プラス *take*) だが、英語史を紐解くと、それらは実は、アングロサクソン人たちが元々所有していた英語に「固有の」動詞ではなく、今から1200年以上も前にイングランドに襲来・定住したヴァイキングたちが当時使用していた「古ノルド語 [8世紀~14世紀]」(Old Norse: 以下 ON と略す) から「借りた物」であることが判明する。もちろんそれらは借りっぱなしで未だに返してはいないのだが、それらを含めて ON からの借入語彙が英語の「書き言葉」に顕著に現れ出すのは、その200年後の中英語 (Middle English: ME) 期まで待たねばならなかった (Filppula 2010: 436)。そして我々はそれぞれの ON 不定詞形 *gefa*, *geta*, *taka* にそれらのルーツをしっかりと見ることができるのである (Gordon & Taylor 1957<sup>2</sup>, Barnes & Faulkes 2007<sup>4</sup>, Barnes 2008<sup>3</sup>)。

さらに、Horobin (2010: 87) は、“... important feature of Norse influence on the English lexicon is in the phrasal verbs.” と言い、いわゆる「句動詞 (phrasal verb)」用法の最初期の例として、*zyfen up 'give up'*, *faren mid 'go with'*, *leten up 'let up'*, *tacen to 'take to'* 等を、12世紀の *The Peterborough Chronicle* から指摘している。また、*get* に関しては、“Also of Norse influence is the use of the verbal operator *get*, as in our modern idioms *get up*, *get away*, *get out*; this feature is particularly common in northern texts such as *Cursor Mundi*.” (Horobin 2010: 87) とあるように、

借入された動詞 *get* が、英語での句動詞構造を有する動詞群に新たに仲間入りしたことがわかる。<sup>1)</sup>

そこで本稿では、アングロサクソン人たちが話していた古英語 (Old English: OE) とヴァイキングたちの ON が言語接触を果たした結果、「受益言語 (recipient language: RL)」である英語に移入されることになった *get/give/take* 三動詞と、その接触の影響が大であるとされる句動詞について再考してみたい。

本稿の構成は次の通りである。次節ではまず、*get/give/take* の三動詞に関して、*The Oxford English Dictionary* (1989<sup>2</sup>: 以下 *OED*<sup>2</sup> と表記) および *Middle English Dictionary* (1956-2001: *MED*) の記述から得られる基本的情報を確認・整理した上で、3 節では、Burnly (1992), Fischer (1992), Fischer & van der Wurff (2006) の議論を検討しながら、それら三動詞を持つ句動詞の ME での展開・分布を中心に議論する。4 節では、その背景であるヴァイキングのイングランド襲来・定住・アングロサクソン人との共生についてもう一度振り返り、そして、5 節で全体をまとめることにする。

## 2 *get/give/take* に見られる借入の度合いの違い

前節で、*get/give/take* はヴァイキングからの「借り物」であることを指摘したが、その「借り方」は押し並べて等しいというわけではない点をまずこの節で確認しておこうと思う。*OED*<sup>2</sup> (s.v. *get, give & take*) と *MED* (s.v. *geten, yeven & taken*) の記述からは、次のことが理解できる。

第一に、形態的な観点からすると、同じゲルマン語同士でありながら、言語材料を供給する側の「起点言語 (source language: SL)」の ON にはあるが、それを受け入れる側の受益言語 (RL) の OE には元々影も形もなかったのは、この三者の中では、*take* だけである。したがって、これは正真正銘の「借入語 (loanword)」と言っている。アングロサクソン人は、ヴァイキングとの接触以前は、ON 系の *take* に類する動詞形ではなく、現代ドイツ語の *nehmen* や現代オランダ語の *nemen* に相当する *niman* ‘to take’ を用いていたが、ME 期に入り、徐々にその *niman* が *take* に取って代わられていったのである (Townend 2006: 78, 下宮・金子 2006: 162 も参照)。

第二に、*take* の次に借入の度合いが強いと言えるのは、*get* である。OE には、*get* に相当する類似の形態として *gietan* ‘to obtain’ が既に存在しており、意味上・形態上、両者にほとんど差はなかった。したがって、一見すると *get* をわざわざ借入する理由はなかったように思われるが、そうではない。実はこの *gietan*、発音が硬口蓋接近音 /j/ を含む /jietən/ であり、ON *geta* /getə/ に見られるような有声軟口蓋閉鎖音 /g/ を持っていなかった点と、正確には独立語の動詞 *gietan* としてではなく、*begietan* ‘to beget’ や *forgietan* ‘to forget’ などの複合動詞の主要部をなす「形態素」-*gietan* としての機能だけしか持っていなかった点で、ON 由来の *get* とは大きく異なっていたのである (*begietan* と *forgietan* は、ME 期には、硬口蓋接近音 /j/ に書記素 <y> を当て、それぞれ *beyeten* と *foryeten* と表記されるようになっていた。下例 (12a) も参照)<sup>2)</sup>

最後に、*give* であるが、OE にはやはり、意味・形態の類似する同族系の *giefan* があるにはあった。しかしその ME 発展形である *yeven* を見てもわかるように、それは音韻的には、\*/gievən/ ではなく /jievən/ と発音されていた (上述の -*gietan* および下例 (12b) 参照)<sup>3)</sup> 最終的には、ME 期に ON 系北方方言形 *give* との共存を経て、英語標準形においてはその *give* の方が採用され、OE 系の *yeven* は放棄されたことになる。ただ、-*gietan* と違って、*giefan/yeven* は独立した動詞形として OE 以来ずっと機能してきたので、*MED* が “From two sources [= OE & ON]” と述べ、*OED*<sup>2</sup> が “it seems most probable that they [= the g /g/ forms] are due to Scandinavian influence.” と指摘していることから、この場合、単に ON 系 *give* を借入したと言うよりも、形態的には、古い OE の綴りを復活させ、そこに ON に特徴的な有声軟口蓋閉鎖音 /g/ のみを移植したとも考えられる。その意味では、*give* は三者の中では一番「軽い」音韻借入形態と言えるのではなかろうか。

さらには、三動詞それぞれの借入の程度は、その初出例が、*take* は c1100 年、*get* は c1200 年、*give* は c1300 年というふうに約 100 年ごとのタイムラグに反映されていると言える。

このように、これら三動詞は、程度の差こそあれ、すべて何らかの形で ON と密接な関わりを持つと考えていいわけだが、ここで、いわゆる「借入 (borrowing)」という現象について少し検討したい。

Winford (2010: 172) は、「借入」を次のように定義する。

(1) the transfer of linguistic materials from an S[ource]L[anguage] into an R[ecipient]L[anguage] via the agency of speakers for whom *the latter* is linguistically dominant language, in other words, via *RL agentivity* (筆者による強調)

(1) でもし、*the latter* が *the former* になり、*RL agentivity* が *SL agentivity* になった場合は、「借入」とは呼ばれず、

それは「押しつけ (imposition)」と呼ばれることになる。

このことを上記三動詞に絡めて言うならば、なぜ(ドイツ語やオランダ語ではその同族形がいまだに保持されているのに) *niman* が捨てられ *take* が採用されたのか、なぜ硬口蓋接近音 /j/ が有声軟口蓋閉鎖音 /g/ に取り替えられたのか等、それらに関する具体的なメリットがアングロサクソン人の側にあったのかどうか判然としないところがある。<sup>4)</sup> 普通何らかの借入が行われる際には、少なくとも “need and prestige” (Winford 2010: 177) といった社会的心理的動機が必要だからである。しかし、これが「借入」ではなく、ヴァイキングが英語を習得する際に(バイリンガルになっていく過程で)、ヴァイキング側からの無意識的な「押しつけ」の一環として行われたと考えると、スムーズに説明できる。この押しつけに関して、Townend (2006: 83-84) では、/j/ を /g/ と発音するといった、その音韻面が特に強調されているが、*take* のような語彙面においても当然このような心理的仕組みは十分に働いたと考えられる。そしてその後、アングロサクソン人とヴァイキングが徐々に融合を果たし、ヴァイキング側の ON から英語への language shift (言語総入れ替え) が完了するに及んで、SL agentivity を色濃く反映する英語北方方言として定着していったのである。同様のことは、Roberge (2010: 420-421) の、“The presence of Norse speakers have facilitated the selection of *are* < Midland/Northern ME *are(n)* < OE (Mercian) *earon* (cf. ON 1 pl. *erum*, 2 pl. *eruð*, 3 pl. *eru*) at the expense of the southern plural present indicative form of ‘be’ (OE *sindon*, *sint*).” という指摘にも垣間見ることができる。

### 3 get/give/take と句動詞

Harbert (2007: 366) は、「句動詞」について次のように言う。

(2) Highly characteristic of the G[er]M[ani]C languages are “particle verbs,” or “phrasal verbs,” that is, verbs which co-occur with morphemes, often homophonous with adverbs or locative prepositions, forming with them a semantic unit....Examples include EN[glish] *look out*, GE[rman] *annehmen* ‘accept’, SW[edish] *resa av* ‘depart’, FR[isian] *stilstien* ‘stand still’, GO[thic] *innatgaggan* ‘go in’, AF[rikaans] *aantrek* ‘put on’.

このように、ゲルマン語に特徴的とされる句動詞は、一見すると、同じ句動詞という範疇でも、句動詞という言い方に矛盾するような「一語のもの」もあるように思われるが、Burnly (1992: 444) は、上記 *annehmen* や *stilstien* のような動詞を「分離可能複合語 (separable compounds)」と呼び、以下のように定義している。

(3) a type in which a verbal base was, in certain syntactical environments, combined with a particle (a locative adverb or a preposition), which in other syntactical environments could occur separated from this base

この定義によれば、例えば、ドイツ語の *zurückkommen* ‘to come back’ は、命令文では、*Kommen Sie zurück*. ‘Come back.’ という具合に複合語を構成する要素が必ず分離されなければならないので、潜在的には複数語からなる「句」を構成していると考えられている。<sup>5)</sup>

だとするならば、Fischer & van der Wurff (2006: 190-191) が、*turn up* や *hold out* のような現代英語 (Present-day English: PDE) の句動詞に見られる「不変化詞 (particle)」を持つ動詞構造は、OE にまで遡るとして次のような例を挙げることに首肯できる。

(4) a. *Hi ða upastigon.*

[= They then *up*-went. ‘Then they *went up*.’]

(*ÆCHom* II, 18 172.95)<sup>6)</sup>

b. *þa sticode him mon þa eagan ut.*

[= then *stuck* him people the eyes *out*. ‘Then they *gouged out* his eyes.’]

(*Or* 4.5.90.13)

つまり、(4a) の *upastigan* も構文によっては、(4b) の *utstician* が *ut* と *stician* に分離するように、*up* と *astigan* が分離し、いわゆる句動詞的な振る舞いをする可能性があったということである。なお、Fischer (1992: 386) は、このような *upastigan* や *utstician* を「接頭辞付き動詞 (prefixed verb)」とも呼んでいるが、これには二種類あった。一つは、上記のように接頭辞(不変化詞)が分離するタイプだが、もう一つは、*besprecan* ‘to speak about’ のように元々接頭辞が分離しないタイプである。したがって、後者までも PDE 句動詞のルーツであるとはなかなか言いがたい面があるが、*to speak about* のように、最終的に句動詞に置き換わったという事実からすれば、ある種のルーツと言っているのかもしれない (Fischer は、OE 期の *be-* や *for-* 等の「いわゆる」接頭辞はその大半が消滅してしまったことが、不変化詞分離型句動詞への置換の一因であるとしている)。

さて、不変化詞が分離するタイプの句動詞のことである。Fischer (1992: 386) は、OE では、(4) のように当

該不変化詞は動詞の前にも後ろにも現れることができ、その位置決定は、主節（語順は SVO）か従属節（SOV）かに依るところが大であるとし、“As a rule, the particle precedes the verb in a subclause; in the main clause the particle follows the verb.”と指摘しているが、これは (4b) には当てはまるが、(4a) には当てはまっていない。(4a) の場合、おそらく接続詞 *ða* のために、OE に典型的な「動詞第二位 (verb-second: V2)」が実現されず、不変化詞は分離しなかったと考えられる。逆に、下例(5a)では、従属節にもかかわらず、不変化詞が分離している (Fischer & van der Wurff 2006: 191)。

(5) a. for ðan þe se stream *berð aweg* placidum.

[= ‘because the stream carries away Placidus.’]

(ÆCHom II, 11 95.97)

b. for ðan þe se stream placidum *awegberð/aweg berð*.

しかし、ここでもし従属節に典型的な SOV の語順が維持されていたなら、(5b) のように動詞成分で締めくくられるために *aweg* は前に置かれたであろう。要するに、OE では、動詞 (V) のスロットには、原則として動詞成分のみが要求される傾向があったのだろう（もちろん分離不可能な不変化詞を持つ動詞の場合は、主節であろうと、そのままの形で使われることは言うまでもない）。このように、句動詞の分離展開と従属節における SVO 語順の確立には密接なつながりがあったのである。

次に、この流れは ME 期に入り、以下の (6a) から (6c) への発展を遂げる (Burnly 1992: 444)。

(6) a. inseparable particle + verb compounds (*understand, overtake, etc.*)

b. phrasal vcrbs consisting of verbal base + particle (*take up, write up, etc.*)

c. derived nominal compounds of the two types (*outcry, write-off, etc.*)

(6a) は、OE から継承されてきたもので、先の Fischer の指摘のように、一部は新しい句動詞へと置き換わっていった。したがって、Faarlund (2004: 163-164) が示す下例 (7) の ON の例のように、分離可能な不変化詞を持つ複合動詞が、その不変化詞を常に動詞から分離したままで保持するという、この (6b) のステージこそが、英語がヴァイキングたちの ON と接触することによってもたらされた結果であると考えられている。

(7) a. hvé nær skaltu *upp taka* slíkan ágætisgrip?

[= when shall-you *up take* such glory-thing? ‘When are you going to wear such a splendid piece?’]

(*Laxdæla saga* 146.8 [1330])

b. ok hafði *tekit upp* mikit fjölmenni

[= and had *taken up* big crowd. ‘and had gathered a big crowd’]

(*Laxdæla saga* 160.14 [1330])

ただ、Bennett & Smithers (1968<sup>2</sup>: xxxiv) によれば、例えば、ON の句動詞 *hlaupa á* ‘to assault’ から派生名詞 *áhlaup* ‘attack’ が、同じく *hefja upp* ‘to begin’ から *upphaf* ‘beginning; cause’ が作られていたということから、ON 派生名詞は不変化詞前置タイプであったことがわかる。これに対して英語では、不変化詞前置タイプのみならず、*write-off* のような「後置タイプ」派生名詞をも創造するステージにまで至った点は特筆に値する。

また、(6b) のステージでは、ヴァイキングたちの句動詞に倣った新たな句動詞も英語に導入されたようである。Burnly (1992: 444) は、*Havelok the Dane* (1280-1310 年に成立) から *utbede* ‘to call out (a militia)’ を指摘しており、これは、ON 句動詞 *bjóða út* を移入したものと考えられている。ここで一つ興味深い事実がある。それは、この *utbede* の例のように、このステージ以降に現れる句動詞すべてにおいて、必ずしもその不変化詞が常に分離した形で表されるようになったわけではないということである。Burnly (1992: 445) は、同じ意味を持ち、形態上競合する両者をいくつか提示しているが、不変化詞を後置するタイプをその出現年代順 ([ ] で表示) に並べ直してみるとおもしろいことがわかる。

(8) a. fare forth [1225] ‘set out’ vs. forþfaran [OE] ‘die (euphemism)

b. pass over [ca 1300] vs. overpass [1325] ‘go over’

c. flee out [1300] vs. outflee [1325] ‘expel, banish’

d. go out [1325] vs. utgan [OE]

e. fall by [1325] vs. befeallan [OE] ‘happen, befall’

f. fare out [1393] vs. outfare [1150] ‘go out’

g. leap out [1398] vs. outleap [1375] ‘spring out’

h. look over [ca 1400] vs. overlook [ca 1400] ‘survey from on high’

i. hente out [ca 1400] vs. outhente [1450] ‘grasp, seize’

OE期は、不変化詞を前置することが原則だったわけだから、(8a), (8d), (8e)に見られるように、13・14世紀頃になると、それを分離・後置するタイプが主流となってくるのは当然の流れだが、むしろ前者のタイプの方が後者のタイプよりも遅く発達したことがわかる、(8b), (8c), (8i)といった例も少なくはないという事実もある。前者の形は、to update や to download 等、特に不変化詞を分離しないタイプの複合動詞としては、PDEでもその生産性は十分に保持されているのだが、後者の分離したタイプの方が先にできて、後から合体した形が現れるという、この、OE期とはまったく逆の展開になっている点は、前述の語順による制約も消失したはずのME期にあっては、大いに議論の余地がある。例えば、(8h)は、両者がほとんど同時に現れたのだろうが、その後意味分化を起こすことによって、両者共に生き延びたことは容易に想像がつく。だからこそ、「同じ意味を持つ」接頭辞タイプをわざわざ新たに後から生み出すことの意義は何かということが問題となる。一つ考えられる理由は、詩において「脚韻 (rhyme)」を作るために不変化詞を前置した形も必要とされたのではないか、ということである。同様に、(8f)で、なぜME期に入ってから不変化詞を前置した形の方が新たに(先に)作られたのかということ考えたときにも、この脚韻の利便性をはかるためという考え方は一定の説明力を持つと思われる。ちょうど made を、操作語 do を使って did make として、名詞 ache と脚韻をあわせるのと同じ発想である。以下の(14)・(15)でもう一度この問題を議論する。

では、本稿で取り上げる get/give/take を含む句動詞は、ME期にはどのような使われ方・分布を示していたのだろうか。12～14世紀に初めて英語に現れたものを以下に OED<sup>2</sup> より拾い出してみる。

- (9) a. get again [a1300], get away [a1300], get out [a1300], get together [c1400], get up [c1340]  
 b. give about [1382], give again [a1300], give away [a1400], give out [c1340], give over [c1325], give up [1154]  
 c. take to [1154]; take with [1127]; take away [a1300]; take down [a1300]; take forth [a1300]; take in [a1300]; take off [a1300]; take on 'to begin, commence' [c1200], 'to act, proceed' [c1205]; take out 'to leave out' [c1200], 'to withdraw' [a1300]; take over [c1330]; take out of [c1200]; take up [a1300]

ここに類出する a1300年・c1340年と c1200年という年代は、それぞれ *Cursor Mundi* と *The Ormulum* の成立年代である。両者ともに ON の影響を強く受けた ME 方言で著されている。この中で、前置詞を不変化詞とするものは、明らかな新規借入語彙の take との共起に限られており (take to および take with)、しかも 12 世紀という比較的早い時期に現れている。そこで、12 世紀には既に定着していたと思われる句動詞の例を以下に挙げる (以下、[] 内に方言の種類と成立年代を示している)。

- (10) a. þet landfolk him wið toc. (O.E. Chron. [EMid.] Laud MS. [1127])<sup>7)</sup>  
 b. [He] sende efter him & dide him zyuen up ðe abbotrice of Burch. (O.E. Chron. an. 1132 [1154])  
 c. & te eorl of Angæu wærd ded, & his sune Henri toc to þe rice. (O.E. Chron. an. 1140, MS. E [1154])  
 d. 3ho toc onn ful aldeliz/ To frazzenenn Godess enngell. (Ormin [EMid.] 2553 [c1200])  
 e. Þatt 3er þatt he wass takenn ut þurh Drihhtin Godd fra manne. (Ormin 8601 [c1200])  
 f. To takenn ut off helle wa þa gode sawless alle. (Ormin Ded. 209 [c1200])

(10a) の wið toc 'with took' は、明らかに ON taka við 'to receive' を取り入れたものであるが、他の (10b) ~ (10f) はすべて不変化詞が後置されていることから、この (10a) でのみ不変化詞が前置されている点が気になる点である。これは、目的語の him まで前置されていることから、『アングロサクソン年代記』に見られる OE の慣習の名残として、SOV 語順の達成の方が優先された結果であろうと思われる。その際、wið him ではなく、him wið になっている点、そして wiðtoc という一語形態ではなく、wið toc と二語で表されている点で、逆に、だからこそ、V[erb] (Prep[osition] N[oun]) という構造ではなく、(V Prep) N という句動詞連鎖の構造が成り立つと言える。<sup>8)</sup> いずれにせよ、12 世紀には、英語はヴァイキング影響下の前述のステージ (6b) にあることが窺われる。

また、(10b) が zyuen ではなく、硬口蓋接近音 /j/ を表すもうひとつの書記素 <3> を使った zyuen となっていることから、ON の gefa upp を直接移入したのではなく、むしろその構造と意味のみを取り入れつつ、形態的には OE 系動詞の方を発展・踏襲していることがわかる。ちなみに、他の give の例についても確認してみると、

- (11) a. Here i yeld yow yur mone, ges me a-gain mi war. (Cursor Mundi [N.] 16476 [a1300])  
 b. And þat cursyng vnlawful es .. þe whilk es gifen out ouer tyte, with-owten ani right respite. (Cursor Mundi 29518 (Cott. Galba) [a1300])  
 c. Pryde and covetise/ Gyveth over al judgement,/ And turneth lawes up and down.

(*Poem times Edw. II* [EMid.] (percy Soc.) xlvi [c1325])

d. Loo! y *zaue about* [or *cumpasside*] thee with boondis. (Wyclif Ezek. [EMid.] iv. 8 [1382])

e. Thou hase *giffene* thi part of bothe *away*. (*Sir Perc.* [N.] 1983 [c1400])

(11d) のみに *zaue about* という OE 継承形が現れているが、これは Wyclif(fe) が東中部方言を中心としたロンドン方言で聖書を著したからであろう。さらに、(11a), (11b), (11c) は北部方言で書かれているので、ON 系の *give* が使用されていて当然だが、東中部方言の (11c) でも *give* が見られるということは、この詩は東中部の中でも特にヴァイキングとの接触が密であった北東地域で作成されたものと考えられる。

*MED* (s.v. *geten, yeven & taken*) の記述には、さらに、Cp. として以下の動詞群も挙げられている。

(12)a. *biyeten, foryeten*

b. *ayeven, foryeven, iyeven, unyeven*

c. *ataken, bitaken, itaken, oftaken, ontaken, outtaken, overtaken, undertaken, uptaken, withtaken*

特にこのリストで、明らかな新規借入語である *take* が現れる句動詞 (12c) を見ると、不変化詞の分離を常態とする ON 方式が定着しつつあった一方で、Burnly (1992: 444) の言う (6a) の、不変化詞を前置し、なおかつそれを分離しない接頭辞タイプも、それと同時に「新たに」作られていたことがわかる。しかし (12c) の中には、上述の、不変化詞を常に分離するタイプとしても機能するものが三つある。それは、*outtake(n)*, *overtake(n)*, *uptake(n)* である (上例 (9c) 参照)。両者の初出例を *OED*<sup>2</sup> から、以下の (13) ~ (15) にそれぞれ併記してみる。

(13)a. I *toke þaim ute* on [v.r. with] mi right hand.

(*Cursor Mundi* 20564 (Gött) [13\*\*])

b. Torn, Laverd, and my saule *out-take* [L. eripe].

(*E. E. Psalter* [N. or Mid.] vi. 5 [a1300])

(14)a. The *païens token ouer* our men,

And fast leyd upon hem then.

(*Arth. & Merl.* [EMid.] 7163 [c1330])

b. *þe veond .. wearð ibunden [hete] ueste mid te holie monnes beoden, þet of-token* [MS. T. *ouer-token*]

him ase heo clumben opward toward te heouene.

(*Ancr. R.* [SW.] 244 [a1225])

c. The *fifte that he ouertok*,

Gaf he a ful sor dint ok.

(*Havelok* [EMid.] 1816 [c1300])

(15)a. Drightin has herd *þi barn cri*,

Rise and *tak it up* for *þi*.

(*Cursor Mundi* 3064 (Cott.) [a1300])

b. Min fligt .. ic wile *up-taken*,

Min sete norð on heuene maken.

(*Gen. & Ex.* [EMid.] 277 [c1250])

(13b) に見られる *out-take* は、ラテン語 *eripere* の「なぞり」であるとされる。つまり、*e-* [*<ex-*] を *out* で表し、*-ripere* [*<rapere*] を *to take* で表しているのだが、この場合、原典が複合動詞であったために、あえて不変化詞を分離しなかったと考えられる。その後動詞形の *to outtake* は、分離タイプ *to take out* の隆盛に押されて廃用になり、PDE では、(6c) のステージであるその派生名詞だけが生き延びている。

次に、(14b) の *of-take* については、*OED*<sup>2</sup> (s.v. *overtake*) に、“In Early ME. *overtake* and *overgo* had the parallel forms *OFTAKE*, *OFGO*, which seem to have been the strictly southern equivalents (*oftake* being actually exemplified earlier than *overtake*)” (筆者による下線) という非常に興味深い記述があり、確かに、*Ancren(e) Riwlwe* は南西部方言で著されている。この *take* はおそらく、西中部方言を介して南まで下っていったのであろう。<sup>9)</sup> ただ、ハイフンでつながれているところを見ても、純粋に一語とは捉えられていなかったことが窺える。そして (14c) の *ouertok* の場合は、明らかに *ok* との脚韻の位置に現れているのがわかる。

(15b) の *up-taken* については、*OED*<sup>2</sup> (s.v. *uptake*) には、M[ediaeval]Sw[edish] *up-/upptaka* からと説明されているが、少なくとも ON としては、名詞形 *upptaka* のみが記載されており、動詞形はすべて *taka upp* となっている (Zoëga 1910: 431-432 & 453)。もちろん、名詞を動詞に品詞転換して利用したとも考えられるが、ここでも *of-take* のようにハイフンが現れているところからしても、この場合、次行の *maken* との脚韻を作るために *up* を前置したと考える方が合理的ではなかろうか。

本来は分離していた不変化詞を、脚韻を整えるために動詞に対して前置することは、それが不変化詞前置という行為自体の唯一絶対的な理由ではないとしても、英語には元々分離接頭辞タイプ句動詞の伝統があったことに加えて、分離が常態化した後も付随する不変化詞の遊離性の高さが幸いし、当時ある種の利便性を持って詩人に受け入れられたであろうことは十分に想像できる。

## 4 アングロサクソン vs. ヴァイキング

前節まで、新たに英語語彙となった ON 系の get/give/take 三動詞を中心に、ON の影響が大きいとされる、不変化詞を常に分離するタイプの句動詞の発達について議論してきたが、その出発点は言うまでもなく、OE と ON との接触であった。アングロサクソン人もその昔 OE を大陸からイングランドに持ち込んだわけだが、今度はヴァイキングが ON をスカンジナビアから持ち込んだことで、二言語は接触を果たしたのである。Filppula (2010: 436) は、その経緯を以下のようにまとめている。

(16) These invasions [of the Viking Period] started in 787 CE and lasted until 1042. ... Beginning with small-scale plundering forays up until the mid ninth century, the Scandinavian invasions gradually escalated into widespread attacks by large armies and eventually led to extensive settlements of Vikings primarily in the eastern and northern parts of England, the western parts of Scotland, .... Initially very hostile, relationships between the settlers and Anglo-Saxon-Celtic population turned in the course of time into ones favoring peaceful coexistence, intermarriages, and eventual amalgamation of the two populations. This, in turn, meant a considerable influx of Scandinavian elements into the English language, a process which was greatly facilitated by the linguistic affinity of the Scandinavian languages and OE.

Townend (2006: 69) が強調するように、言語接触とは畢竟「その話者の接触」に他ならないことを常に意識するならば、同じゲルマン語同士という OE・ON 間のこのような言語的接近性は、大陸からやってきたアングロサクソン人が、ブリテン島の、後にイングランドとなる地域に居住していたケルト人（ブリトン人 [Britons]）と接触したときよりも、両者間のコミュニケーションにとっては、遙かに有利に働いたと考えられる。<sup>10)</sup> 特に、ヴァイキングたちがアングロサクソン人たちと隣り合わせに暮らした「デーンロー地域」では、“... it is likely that, at least for pragmatic purposes, speakers of the two languages were mutually intelligible to a sufficient extent to preclude the need for bilingualism on either a major or minor scale.” (Townend 2006: 70) という状況であっただろう。したがって、“Viking Age England was thus a bilingual society dominantly made up of monolingual speakers of different languages.” (Townend 2006: 70) と言うことができ、この「異言語モノリンガル話者から成るバイリンガル社会」という背景が、両者間に最終的に起こる英語への言語統一に果たした役割は非常に大きいと言える。

また、そこには当然のことながら、「話し言葉」対「書き言葉」の視点が必要になる。1 節冒頭で述べたことだが、PDE で give や get (およびそれらを含む句動詞) が特に多用される状況は、松本 (1983) が言うように、むしろ「話し言葉」に見られる点を考えてみても、おそらくこの流れはアングロサクソン人とヴァイキングが接触を開始した当初から孕まれていたのではないかと思われる。しかし、「書き言葉」において ON 系語彙が顕著に現れるのは ME 期に入ってからにすぎないのだから、それ以前にどれだけ多くの get/give/take や新しいタイプの句動詞が両者の口に登ったのかということは、接触最初期の OE 期の状況なども含めて我々はすべて想像に頼らざるを得ない。これはもう一方の ON の側にも言えることで、我々が主に見ることができる資料は、12～14 世紀に「書かれた」サガである。その他にも、アングロサクソン宮廷で吟唱された、修辭的技巧に満ちたスカルド詩も残っているが、一般民衆が使っていた ON とこれを完全に同一視することはできないだろう。<sup>11)</sup> したがって、このことは逆に、我々が具体的に目している ME の状況は、むしろ書き言葉に「まで」接触の影響が及んでいたことの証左と見るべきであろう。Horobin (2010: 85) も、“During the ME period, following the demise of L[ate]W[est] S[axon] and the emergence of writing systems closely reflecting local usage, Scandinavian words began to appear in the written records, although they were doubtless used in spoken language during the OE period.” と指摘している。

Townend (2006: 66) は、“With the exception of a handful of inscriptions in the runic alphabet, Norse was never written down in England, only spoken.” と述べており、そもそも、当時ヴァイキングが使っていた ON そのものに書き言葉としての機能が欠落していたばかりでなく、当時は異言語モノリンガル話者による「口語」コミュニケーションこそが OE・ON 間の接触の土台をなしていた。それは、Wales (2006: 58) が、“...in the Danelaw area, there existed a ‘diffuse’ rather than ‘focused’ situation, speakers having no clear idea about what language they were speaking; and what would and would not constitute ‘English’ would be of no great importance.” と指摘する言語環境であったと想像され、自分の母語か相手の言語かということあまり意識することなく言語活動を行うことが可能であったと考えられている。このような状況の中では、ヴァイキング側が、もう一歩踏み込んで自分たちの母語を使うのではなく、第二言語である英語を習得しようとして積極性を発揮したならば（最終的に彼らは language shift を起こしたのだからこれは単なる仮定ではなく、彼らは実際に積極性を発揮したのである。なお、

そのような積極性には、松瀬 (2005: 125) で指摘したように、コミュニケーション参与者間に現れる「聞き手に対する態度 (listener-oriented attitude)」も関わっていたと思われる)。SL agentivity による無意識の「押しつけ」のような心理作用はごく当然のごとく働いたであろう。それは裏を返せば、ヴァイキング側のある種の「近接言語に対する甘え」と言ってもいいかもしれない。しかしこのことは、アングロサクソン人側にしてみれば、ヴァイキングが彼らの母語である ON を使ったとしても、そこそこのコミュニケーションが可能であったのだから、まして相手の方から自分たちの母語である英語を使用する方へ歩み寄ってくれるとしたら、その英語に、たとえ /j/ を /g/ で発音するといった音声面や、niman ではなく taka を使ってしまうような語彙面において、多少の逸脱が見られたとしても、むしろそれを積極的に受け入れる下地は容易に形成され得たであろうし、その結果両者間のコミュニケーション達成度は遙かに高くなったと言えよう。そして最終的には、ヴァイキングによって「はからずも」導入された新たな形の英語の方が、ある種の compromise language または koine として定着し、ME の北部・東部方言を形作っていったと考えられるのである。

このプロセスは、まさに、地球上の各地でこれまで様々な「世界英語 (World Englishes)」が形成されてきた事実と生き写しである。Schneider (2011) は、“the language itself is a product of migration, colonization, settlement process, and contact settings” (p.63) と言い、このような地球規模での Englishes の成立を「植民地化 (colonization) と土着化 (nativization)」および「混種性 (hybridity)」という鍵概念で議論する。後者は、言語が「上層語 (superstrate)、下層語 (substrate)、共層語 (adstrate)」といった層による階層構造をなしていることを示しており、アングロサクソン人とヴァイキングとの共生を考えると、OE に対する ON は、後の英語にとって共層語の役割を十分に果たしたと言っている。さらにこの後、「ノルマン人の征服」以降の多言語環境において、英語はロマンス語 (フランス語・ラテン語) 系語彙を大量に移入することで PDE の骨格を作り上げたのである。

## 5 まとめ

本稿では以下のことを議論してきた。

- (17) a. get/give/take はそれぞれ借入の度合いに差があり、むしろそれは借入と言うよりも、ヴァイキング側の source language agentivity による押しつけを通じて英語にもたらされた。
- b. Verb + Particle という形を固定する新しい形式の句動詞は、ON との接触によってもたらされたが、同時に、同じ意味の旧タイプの Particle + Verb 形式も現れることがあった。これは、一つには、詩における脚韻作成のために詩人によって利用されたためと考えられる。
- c. アングロサクソン人とヴァイキングの接触は、異言語モノリンガル話者による「口語」コミュニケーションを土台として行われ、そのような社会的バイリンガル環境の中で、ヴァイキング側からの英語習得を通じて、最終的に英語への language shift で完結した。

確かに、get/give/take や句動詞は PDE 口語に無くてはならないものであるが、それらが英語に定着していく道筋は、アングロサクソン人とヴァイキングが出会った、今から千年以上も前にすでにできあがっていたと言え、なおかつ今も強い生命力を持ち続けているのである。

## 註

- 1) ここで「操作語 (operator)」として言及されているのは、現代英語 (Present-day English: PDE) において、いわゆる一次助動詞としての do に特徴的に「NICE 特性」として現れるものの内、'Emphasis' に当たる機能のことである (Quirk et al. 1985: 121-125, Huddleston & Pullum 2002: 92-93 参照)。Burnly (1992: 449-450) が、“The structure of such phrases [= phrasal idioms] usually consisted of a verbal operator followed by an abstract noun or adverbial phrase; thus: *do homage*, ... *make complaint*, ... *have mercy on* ... *take keep* ... *hold in despite*.” (筆者による下線) と述べているところからすると、made を did make とするようになり、例えば、to complain を to make complaint と句動詞で表現する際に現れる一群の動詞、do, make, have, take, hold 等が操作語としての機能を持つことになる。
- 2) OED<sup>2</sup> (s.v. get) には、“... the normal equivalents *beyet* and *forjet* were displaced in later ME. in favour of BEGET and FORGET” とあり、ON 系 get の拡張の実態を見ることができる。
- 3) ただ、Horobin (2010: 85-86) は、“A major pronunciation difference between OE and ON meant that words beginning with /

- sk/, /g/ and /k/ in OE are ON in origin, although this is not always clear from the OE spelling, e.g. *giefan* 'give' which could indicate a pronunciation with /g/ or /j/.」と言っており, *giefan* が有声軟口蓋閉鎖音 /g/ で発音された可能性を指摘するが, その後の ME 発展形 *yeven* を見ても, 書記素 <g> は前母音に伴われた場合には, 硬口蓋接近音 /j/ で発音されるという OE の原則 (Smith 2009: 16) は, この場合にも当てはまるものと考えられる。
- 4) 書記素 <g> に対して, /j/ の可能性が排除されるわけだから, ほとんど唯一的に /g/ で処理できるというメリットはあったであろう。ただし, 正確に言えば, <g> は /g/ だけでなく, *dagas* 'days' /dayas/ に見られる有声軟口蓋摩擦音 /ɣ/ にも使用されていたので, 完全に「唯一的」とは言いがたい面があるし, その後フランス語が大量に流入したことにより, 結局 <g> は /dʒ/ も表すようになり (OE において /dʒ/ は <cg> で表されていた), 綴りと発音の一対一対応はまたまた崩れてしまうことになる。
  - 5) ドイツ語では, この *zurück* のような不変化詞を伝統的に「分離の前綴り (trennbare Vorsilbe)」と呼び, これを持つ複合動詞を「分離動詞 (trennbares Verb)」と呼んでいる (濱川 2002: 1793)。
  - 6) 例文 (4)・(5) の [] 内には, PDE 逐語訳と PDE 通常訳を示している。なお, () 内の出典の略号については以下の通り。  
*ÆCHom II: Ælfric's Catholic Homilies II; Or: King Alfred's Orosius; O.E. Chron.: The Anglo-Saxon Chronicle [= The Peterborough Chronicle]*
  - 7) 例文 (10) ~ (15) の出典の略号については以下の通り。  
*Ormin: The Ormulum; Poem times Edw. II: Poem on the times of Edward II; Wyclif Ezek.: The Holy Bible, Ezekiel; Sir Perc.: Sir Percivale of Galles; E.E. Psalter: An Early English Psalter; Arth. & Merl.: Arthur and Merlin; Ancr. R.: Ancren Riwle; Gen. & Ex.: The Story of Genesis & Exodus*
  - 8) Faarlund (2004: 147-148) は, "Intransitive prepositions and other prepositions used without a complement often form a close unit with a verb, and are therefore traditionally called 'particles'." (筆者による強調) として, 動詞と不変化詞の緊密性を示す次のような例を挙げている (例文中 þú 'you' は主格である)。  
(i) a. *gefsk þú upp.* [= give-yourself you up. 'Give yourself up!'] (*Brennu-Njálssaga* 95.24 [1300])  
b. *þá tak þú aftvá hluti.* [= then take you off two parts. 'Then withdraw two parts.'] (*Konungs skuggsiá* 7.1 [1275])
  - 9) Crawford (2003: 60) には, 西中部方言地域の北部 (マン島の対岸地域) に, 古ノルウェー語・古デンマーク語・OE の混交によるスカンジナビア系の地名が数多く見られることが示されている。また, Townend (2006: 64) にも, 同地域でのノルウェー人ヴァイキングの居住地が指摘されており, スカンジナビア系の教区名を持つ地域が数多く示されている。
  - 10) しかし, Filppula (2010) や Trudgill (2010: ch. 1) では, ブリトン人とアングロサクソン人の接触が英語に与えた影響の大きさがこれまで以上に強調されている。
  - 11) 確かに, サガは「言われたこと (= 物語)」であるし, スカルド詩は, 吟唱しそれを聞くという音声としての役割が主であったことは間違いなく, 特に後者の吟唱は, アングロサクソン人とヴァイキングがお互いの母語を通じてある程度コミュニケーションができたことを示す重要な着目点であるが, 日常の話言葉そのものではない点では, これを以てそのままヴァイキングたちがアングロサクソン人に話しかけていた言葉とするわけにはいかない。そこで, Wales (2006: 56) は, 8世紀から11世紀にかけて使われた「口語 ON」を特に *Viking Norse* と呼び, 12世紀から14世紀にかけてエッダやサガで使われた, 「いわゆる」ON とは区別している。

### 参考文献

- Barnes, M. 2008. *A New Introduction to Old Norse, Part I, Grammar*. 3rd edition. London: Viking Society for Northern Research, University College London.
- Barnes, M. & Faulkes, A. 2007. *A New Introduction to Old Norse, Part III, Glossary and Index of Names*. 4th edition with two supplements. London: Viking Society for Northern Research, University College London.
- Bennett, J. A. W. & Smithers, G. V. (eds.) 1968. *Early Middle English Verse and Prose*. 2nd edition. Oxford: Clarendon Press.
- Blake, N. (ed.) 1992. *The Cambridge History of the English Language, Vol. II, 1066-1476*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Bumly, D. 1992. (Middle English) Lexis and Semantics. In Blake (ed.), 409-499.
- Crawford, B. E. 2003. The Vikings. In W. Davies (ed.), *Short Oxford History of the British Isles, Vol. 3, From the Vikings to the Normans*. Oxford: Oxford Univ. Press, 41-71.
- Faarlund, J. T. 2004. *The Syntax of Old Norse*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Filppula, M. 2010. Contact and the Early History of English. In Hickey (ed.), 432-453.
- Fischer, O. 1992. (Middle English) Syntax. In Blake (ed.), 207-408.
- Fischer, O. & van der Wurff, W. 2006. Syntax. In R. Hogg & D. Denison (eds.), *A History of the English Language*. Cambridge: Cambridge Univ. Press, 109-198.

- Gordon, E. V. & Taylor, A. R. 1957. *An Introduction to Old Norse*. 2nd & revised edition. Oxford: Clarendon Press.
- 濱川祥枝 監修. 2002. 『クラウン独和辞典』 東京：三省堂.
- Harbert, W. 2007. *The Germanic Languages*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Hickey, R. (ed.) 2010. *The Handbook of Language Contact*. Chichester: Wiley-Blackwell.
- Horobin, S. 2010. *Studying the History of Early English*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Huddleston, R. & Pullum, G. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Kurath, H. et al. (eds.) 1956-2001. *The Middle English Dictionary*. Ann Arbor: The Univ. of Michigan Press.
- 松瀬憲司. 2005. デーンロー地域での言語使用について. 大津隆広・西岡宣明・松瀬憲司編, 『ことばの標 — 平井昭徳君追悼論文集 —』 福岡：九州大学出版会, 115-129.
- 松本道弘. 1983. 『Give Get 辞典』 東京：朝日出版社.
- Murray, J. A. H. et al. (eds.) Prepared by J. A. Simpson & E. S. C. Weiner. 1989. *The Oxford English Dictionary*. 2nd edition. Oxford: Clarendon Press.
- Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Roberge, P. 2010. Contact and the History of Germanic Languages. In Hickey (ed.), 406-431.
- Schneider, E. W. 2011. *English Around the World: An Introduction*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- 下宮忠雄・金子貞雄. 2006. 『古アイスランド語入門』 東京：大学書林.
- Smith, J. J. 2009. *Old English: A Linguistic Introduction*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Townend, M. 2006. Contacts and Conflicts: Latin, Norse, and French. In L. Mugglestone (ed.), *The Oxford History of English*. Oxford: Oxford Univ. Press, 61-85.
- Trudgill, P. 2010. *Investigations in Sociohistorical Linguistics: Stories of Colonisation and Contact*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Wales, K. 2006. *Northern English: A Social and Cultural History*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Winford, D. 2010. Contact and Borrowing. In Hickey (ed.), 170-187.
- Zoëga, G. T. 1910. *A Concise Dictionary of Old Icelandic*. Oxford: Clarendon Press.